

国語科より③ 『枕草子』「中納言参り給ひて」を考察する

今回は、本校の高校1年生「言語文化」の授業で実践したことをご紹介します。

「言語文化」という科目では、古典から現代に至るまでの文学的な文章を学びます。ただし、古典作品を読み解くためには“古典文法”を知っておく必要がありますので、どうしても文法の学習に偏りがちになってしまいます。しかし、古典文法はあくまでも作品を読むためのツールです。文法ばかり学ぶのではなく、古典作品も味わってもらいたい、という思いで授業をしています。

例えば、2学期に『枕草子』「中納言参り給ひて」を学んだときは、ある問いについて班で話し合ってもらいました。

◆「中納言参り給ひて」本文

中納言参りたまひて

中納言参りたまひて、御扇奉らせたまふに、「隆家こそいみじき骨は得ては
べれ。それを張らせて参らせむとするに、おぼろけの紙はえ張るまじければ、
求めはべるなり。」と申したまふ。「いかやうにかある。」と問ひきこえさせ
たまへば、「すべていみじうはべり。『さらにまだ見ぬ骨のさまなり。』となむ
人々申す。まことにかばかりのは見えざりつ。」と言高くたまへば、「さて
は、扇のにはあらで、海月のななり。」と聞こゆれば、「これは隆家が言にし
てむ。」とて、笑ひたまふ。

かやうのことこそは、かたはらいたきこと
のうちに入れつべけれど、「一つな落としそ。」
と言へば、いかがはせむ。
(第九十八段)

私は素晴らしい扇の骨を手に入れました！今、ふさわしい紙を探しているところですよ。
どのような骨かって？
とにかく誰も見たことがないような、見事な骨なのです。



誰も見たことがないなら、それは扇ではなくて、きっとクラゲの骨なのでしょう！



それはおもしろい！
私が言ったことに
してしまおう！



本文は清少納言の宮中でのエピソードの1つで、「中納言（中宮定子の弟）」が中宮に差し上げるための扇の骨を自慢げに語るのですが、具体的なことを何も言わずに、ただ「誰も見たことがない」と褒めるので、作者が「それならば海月の骨なのでしょう」と機知に富んだ返し（半分嫌味？）をして、その発言を中納言に気に入られた、という話です。

ここで生徒の皆さんに考えてもらったのは、その後の段落で、この話は「かたはらいたきこと」に入れるのがふさわしいけれど、周囲の人に一つも書き漏らすなと言われたので仕方なく書いた、と述べている点です。なぜわざわざこの段落を付けたのか、その意図を考えてもらいました。（以下はワークシートの設問です。）

★本文の二段落目について、以下の二点を班で話し合ってみよう。

- ① 「かやうのことこそは、かたはらいたきことのうちに入れつべけれど」とあるが、清少納言はこの本文で語られている出来事を、どのような話だと考えているのか。参考資料（「かたはらいたきこと」）も参考にして考えよ。
- ② この段落を追加している意図を考えよ。



「かたはらいたし」という語の辞書の意味を確認し、自分なりにどの意味が当てはまるか、考えます。





自分の意見をワークシートに記入した後、お互いの意見を班の中で発表し合います。

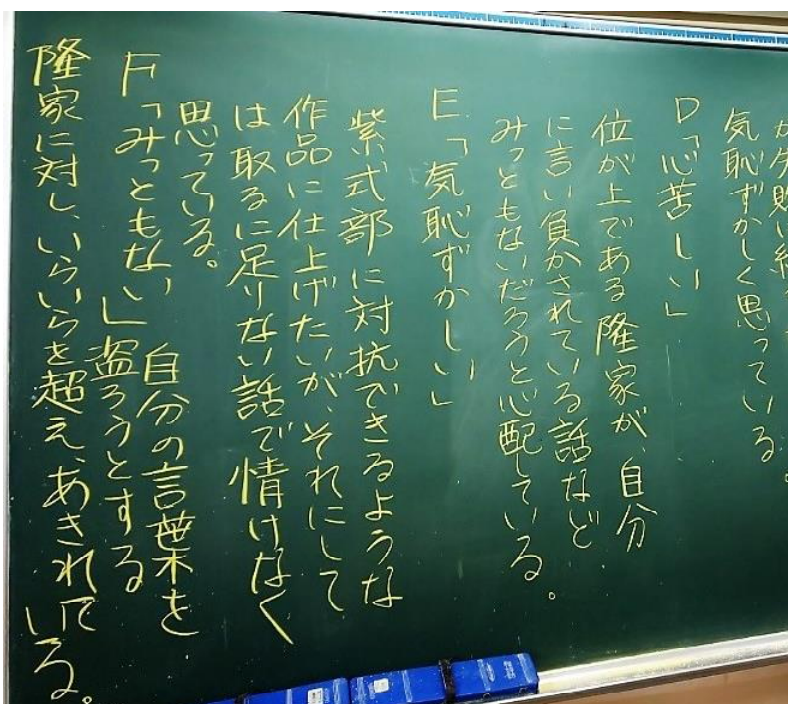
班としての意見をとりまとめ、
代表者が発表します。
(発表内容を教員が板書)



A「**キマリが悪い**」
自分より上の人である隆家をばかにしたような物言いをしたことで、その発言をほめられたことを自慢することは**耻ずかしい**と思っている。

B「**みつともない**」
自分が上きく言い返したことを自慢するのは**みつともない**と感じている。

C「**キマリが悪い**」
自分は皮肉を言ったつもりが**逆にほめられてしまい、意図が失敗に終わったこと**を**气耻ずかしく**思っている。



班で考えて発表してもらった内容は、こちらの想定を越えるものもあり、大変興味深かったです。

最後の段落の意図は、「自慢話になって周囲に嫌な気をもたれるのを危惧した作者が、周囲に言われたから仕方なく書いたと言い訳をするため」というのが一般的解釈です。

もちろんこの解釈と同じように考えた班も多かったのですが、なかには以下のような意見もありました。

- 作者が言ったことなのに、中納言が言ったことにされてしまうことを、「枕草子」で公にすることで阻止しようとしていて、それを周囲の者たちのせいにして隠している。
- (上記とは逆に) 作者がこの話を書いてしまうと、中納言が自分が言ったことにできなくなるので中納言に申し訳ないが、仕方がなかったのだということを分かってもらうため。(中納言の評判を心配する内容。)
- 嫌味で言ったのに、中納言にはまったく通じなかったことを恥ずかしく思っているが、書けと言われて仕方なく書いたことを世間に知ってもらうため。

各クラスの発表を聞いていて少し驚いたのは、多くの班が、清少納言の発言を自分が言ったことにしようと言った中納言の言動をかなり「悪」と捉えていたことです。良い言い回しを「もらった」と言うのは、相手の発言を「うまい」と褒めている行為とほぼ同じの、軽いやりとりだったと思うのですが、令和の若者には通じないということが分かりました。もちろん、どの解釈も間違いではなく、さらに今回生徒たちは、昔の人々がどういったものを「かたはらいたし」と捉えていたかを感じ取ることができたのではないかと考えています。